

ブラックとイエロー

河 口 龍 夫 〈造形作家〉

私は与えられたスペースでの、ビエンナーレのための展示を再び開始した。電気のコムセンとも私が指定した場所に三カ所用意された。展示に必要なすべての素材は、さまざまな努力の結果、ほとんど満足な状態にまで用意された。

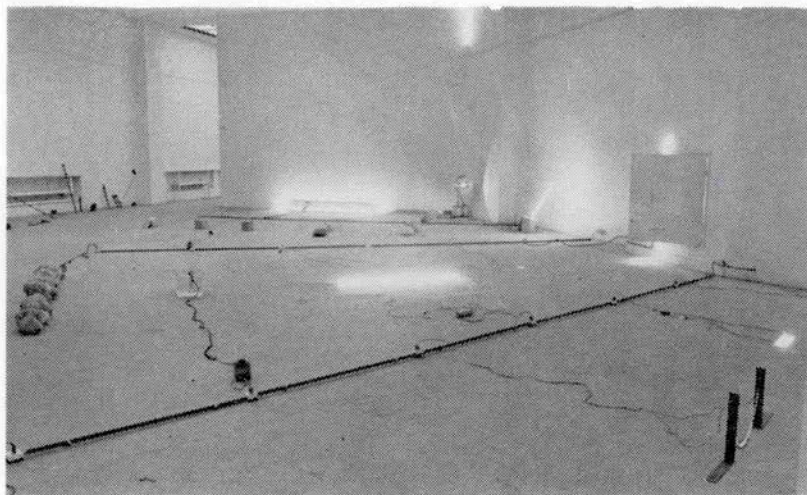
私は毎日、パリ市立美術館に通いつめた。朝から夕方遅く迄制作に専念する充実した毎日だった。とりわけ、日本での毎日のように、作品のまったく売れない私は、創作活動以外に適当なところで働かなければならないといったことから、開放された喜びは大きかった。

扇型に変形している私の展示場所は、展示を簡単にすませることを妨げた。何故なら、ほとんどの美術館や画廊での床面での展示の経験が矩形のスペースであることが常であったからだ。しかしながら、その扇形のスペースでも使い方によっては、或る種の良い効果をあげることは予想された。そのために、私はあらかじめ図面をひいて展示のさまざまなエレメントの配置場所を決定する方法は取らずに、徹頭徹尾その場所に於いて、あちらに置いたりこちらに置いたりして、その場所を私の身体で知ること、そして、なじむことに努め

た。その方法は、大変時間のかかる遅々としてはかどらない方法ではあったが、そのような方法で決定された作品自体の持つ場所性、あるいは臨場性は、ある必然的な自然性と意味をもって、みずからの置かれた場所に確固たる位置をしめた。

エネルギー（電気エネルギー）が、光のエネルギーに、熱のエネルギーに、あるいは運動のエネルギーに、変容する広大な〈関係の場〉あるいは〈関係そのもの〉が存在することに努められた。そして「関係—エネルギー」と題するその作品が関係と存在に対する私の思考の一種の集大成の一面をうかがえるものになるのであった。

ところで、現実の場に於いては、私が想像していたよりも、床から天井迄の高さがかなりあり、床面にはうように配置される作品の状態から想像しても、一層高く感じられた。また、展示部屋の壁面の中央より右よりにドアがあり、そのドアの中に火災の時のためであろうか、それとも掃除のためであろうか水道管と水道ホースが置かれていた。そのドアが視覚的にも大変邪魔に思われた。つまり、言い換えれば作品にとって障害なのであった。かりにそのドアを取り除いたとし



〈関係—エネルギー〉 扇形のスペースに展開される〈関係の場〉右端の扉が問題の、そしてまたブラックとイエローの友情にいた感情を生んだ扉

でも矩形の箱状の穴がはっきりと口を開くだけであった。そこで色々とその点について熟考したあげく、床面と天井の高さの問題に対しては、その解決として光のエネルギーによる作品を新たに用意し、問題のドアは、その当のドアも矩形の箱状の穴も、そっくりそのまま作品の中に組み込むことにきめた。そこで、具体的には天井面と壁面に沿って、部屋との関係がしめす九十度そのものをネオン管にして作ることを、ドアの場所には半開きにした状態で壁面の一部から垂直にその

矩形の窪み通りに型取り、そのまま、床面で水平になる状態そのものの形をネオン管にして取り着けることにした。それから、その場所以外ではいかなる意味も役も立たないネオン管を、その空間性をそえた青い色で発注することにした。そのネオン管も通訳の正木氏の努力を得て、一日かかったとはいえ注文することができた。後はできあがる迄待つのみだ。

すべてのエレメントは周到な配慮でそれぞれの位置を占めた。熱、光、運動、音の場が出現するばかりに配置された。それから、そのそれぞれの配置に従って、配線をすればいいわけだ。しかしながら、その配線は多くの観客が会場内を自由に歩きまわって見ても支障のないように厚いコンクリートの床にドリルで穴をあけ固定しなければならなかった。しかも、電気工事なので、安全のため素人の私がすることは禁止された。そのため、電気工事の専門の老夫の手がすぐのを待たなければならなかった。電気工事の頭領に何度か頼んでもなかなかやってくれなかった。

幸運にも、まるでブリュゲルの絵に出てくるような黒人の人夫が、昼食の休み時間の間にやってくれた。フランスでは異例のことらしい。フランス語のしゃべれない私とフランス語以外の外国語のしゃべれない彼との、ブラックとイエローの手まねと眼を口ほどにものを言わせた奇妙な対話がなされた。それでもみょうなもので、短かい期間ではあったが、友情にいた感情が二人を支配したようであった。

電線の固定は彼によって私の想い通りに完成された。私は彼の名前を聞くことさえわすれていたが、全身で感謝の意を表わした。

神戸の女は日本一

神戸女のプロポーション

華房 良輔 〈放送作家〉

え・貝原 六一



いくら神戸に外人が多いといっても、混血でもない神戸女のプロポーションが良くなるわけでもあるまい、と仰るるむきもあるうけど、神戸女は脚のセンがきれいだし、脚は平均して長いようだし、バスト、ウエスト、ヒップのラインも、日本人離れているように思う。

たしかに、神戸の女はスマートであります。これ、理由のないことではない。そして、外国人が多いことと無縁ではないのだ。

たとえば肉食の習慣。戦後、食生活が幾分か変わっただけで、日本人の身長は伸び、脚が長くなっているのだが、神戸っ子の食生活はずっと以前から、平均的日本人よりはるかに動物性タンパクの摂取量が多かった。新鮮な魚も豊富だったが、そ

れよりも神戸肉である。神戸っ子が日本で一番早く牛肉を食べはじめている。これ、外国人の居留のおかげで、慶応年間からその習慣がひろまっている。さいわい但馬牛にはことかかぬ。

明治八年にはおどろくなかれ、東京五百、大阪三百といわれる一カ月の牛の屠殺量が、比較にならないほど人口の少なかった神戸でなんと、八百頭の屠殺をしている。

肉食が何代か続けば、体質は改善される。

加えて神戸は地方からの人口流入が少なかったから、地方人の混合雑多のルツボとなることなく、神戸っ子が定着したのであろう。

ヨーロッパ人の脚がきれい、中国人の脚のセンがいい、いや朝鮮人の脚がいい、中近東の、アフ

リカの……なんのことはない、日本人以外はみんなそれぞれ、美しくあらせられるのだ。練馬の大根に比較されるような脚が、ほかの国で見当らぬというのは如何なることか。理由は簡単だ。畳の上で正座する習慣は日本だけのものだから、である。

神戸女の脚のセンがきれい、というのは、神戸女が行儀悪く、正座することがないからだ——というのではごさいませぬ。

ご承知のごとく、神戸に居留する外国人は古くからたくさんいたが、明治の頃は永住者は少く、ほとんどが一時的な寄留で、帰国するたびに洋風家具を二束三文で売り飛ばしていったのである。

だから、神戸っ子は、椅子、ソファ、ベッドの生活にそれほど異和感をもたなかったせいもあり、これらの家具を安く仕入れ、畳の上にジュウタンを敷き、脚掛けとベッドの生活をする者が多かったのだ。

これはヨーロッパかぶれの初代兵庫県知事伊藤俊輔（博文）の影響も少なくない。

食住に洋風ムードが強まってくると、このころ衣のほうも必然的にヨーロッパ的になる。

着物姿というのは美しいものだが、着物に合う体形というのは現代ではいただけない。いわゆるズンドウで、胸は平、柳腰といわれる垂れ下がった尻、そして短い脚。これが、着物のおさまらしいような。むろん、脚の太い細いは関係ない。

ところが、洋服を着るようになると、そうはいかぬ。スタイル、プロポーションに留意を払う。

体のセンにフィットしたチャイナ・ドレスを着る中国人が、体のセンを気にしたように。

女性が洋服を着はじめたのも、それがたちまち

普及したのも、神戸が筆頭。明治二十年には小磯吉人の提唱で、女性には束髪、洋装となり、当時神戸の靴屋では男靴より婦人靴のほうが売行きが多かったというから、その勢いの様がしのばれる。少々マユツパ的ではあるうが、神戸女の脚がきれいという理由に、神戸は坂の街であるから、と説明できるような気がする。

神戸っ子は、どこへ行くにしろ、坂を登り下りせねばならぬ。これが、ヒップラインと脚線美を作りあげるのに、大いなる役割りを果たすのだそう。

勤めや学校への行き帰りだけでなく、神戸っ子は六甲、摩耶へ登る習慣がある。裏山登山は神戸名物のひとつだ。これまた、在留外人の影響でうまれたものだという。大正時代には徒步会が組織され、空前の隆盛をかもしている。

子供の頃から急な坂道を登る。爪足に力が入る。自然のおかげで、自然にヒップが強化され脚のタルミや脂肪がなくなる。足首もキュツとしまる。俗説によれば脛括約筋もキュツとしまり強化されるのだそう。

ほく、こんどまた結婚する機会があれば、ぜひたい神戸っ子の女性から選ぶつもりだ。

ただ、聞くところによれば、神戸女はメンクイだとか。これが目下のところ心配のタネなのです。



華房良輔
はな るみ りよう すけ

MAKE UP WITH ROYAL

二ツ目・三ツ目の
メガネにHOYA
サンドライブ
サングレイ
サンブラウンを



 神戸眼鏡院

元町店・元町3丁目 ☎(321)1212代表

三宮店・さんちかタウン ☎(391)1874~5

元町店は毎水曜日がお休みです

三宮店は第2、第3水曜日がお休みです



三宮店(元町大丸前)

装いも新たに三宮店がオープンいたしました。お気軽にご利用下さいませ。



本	店	三宮生田神社前	TEL(331)1694
三	宮	店 元町大丸前	TEL(331)2101
さん	さ	か店 三宮地下街スイーツタウン内	TEL(391)3539



☆座談会／ファッションとレジャー

自己主張のある余暇を

田中 国夫 〈関西学院大学教授・社会心理学研究室〉

山本 敏雄 〈兵庫県企画部文化局長〉

藤田 敬一郎 〈神戸新聞コミュニティ情報センターチーフディレクター〉

妹尾 美智子 〈神戸市婦人団体協議会専務理事〉

本誌が発刊当初から探究しつづけてきたものが、
『神戸らしさ』の文化の発掘であった。文化を即生
活とみると、神戸に住む人々のライフ・スタイルこ
そ、神戸文化である。この神戸らしさを、さらに色
どり、楽しくしていくことは、まさに『文化開発』
そのものではなからうか。

『ファッショ都市・神戸』はそのような環境の
なかで息づいている。

そこで、ファッショ都市・神戸の本質的な理解
——神戸らしさの開発の一助にと、キャンペーンを
繰りひろげることが、本シリーズの趣旨である。

今回は、余暇主導型の生活設計——余暇とは自分
を発見する時間として、この時間で豊かな人生を色
どるファッション・ライフを創り出しうる可能性
——と神戸らしさを語る内容である。

★なくなったゆとり

藤田 企業では週休二日制に踏み切ったところが多いで
すが、ホンネは暇だからそうしているんです。

妹尾 週休二日というところで休むとカッコいいです。

けど、ホンネは休んで貰った方が助かるんです。

田中 若い連中には遊びは遊び、仕事は仕事という分離
を割とハッキリとする向きが多くなって来たようですね

妹尾 それはいえるでしょうね。けど、奥さま方は週休

二日になって音をあげているでしょうね。遊び方なり余

暇の過ごし方をみんなが知らないからですね。だから、

一日位なら辛棒するけれど、二日もあるとき使われて

いるわけですから、かえって疲れる。余暇の使い方をみ

んなが知ったときは話は別ですが、今の平均的な家庭の

状態では週休二日ってのはしんどいですよ。

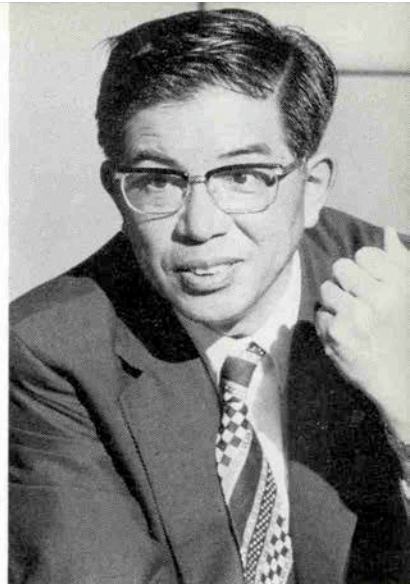
山本 文化環境のベースは余暇なんです。生活文化に
なってきたと特にそうですね。



山本 敏雄さん

余暇という字がそもそもいかなのじゃないですか。余った暇じゃなくて人間にとって一番大切な時間だというとり方をしないか。ゴロ寝をしたり休養しているのが当たり前のようになっているんですが、ぼつぼつ、休養じゃなくてそれが人間生活のなかで最も大切なんだからもっと有効にという考えが出て来るのじゃないですか。仕事のなかに生きがいを感じる人は単純労働になるほど少ないわけですから、自由時間のなかで生きがいを感じることを考えないと、生きているという感じがしないのじゃないでしょうか。自由時間の生かし方を知らない人たちに対してこんな生き方もありますよということをご指導するのも一つの行政じゃないでしょうか。

田中 仕事のなかで単純労働の場合は生きがいを感じら



田中 国夫さん

れない。だから、そのかわりに余暇のなかで生きがいを見出すというのは一つの論理ではあるけれど、本当にそうだろうか。単純労働であれ、そのなかに仕事の喜びが持てる者にして初めて遊びのなかにも喜びが持てる。その両方に相関があるのじゃないか。仕事が面白くない人は遊びも面白くない。というより面白くできない。そういうものじゃないでしょうか。

妹尾 日本人が御馳走を食べようとか、してあげましょうとかいうでしょう。あれはそもそも日本人の食生活が貧しい現われだという論があるんです。平素からとにかく飢えに足りたらいという昔からの貧乏人根性がありますから、平素はお茶漬けサラサラで、時々御馳走しようとか、人がいらっしやるから御馳走しようじゃないかということになるんですね。外国に行きますと毎日家庭で食べている食事もお客さんが来たときの食事もそのベイスはまったく変わらないわけですね。食事そのものが生活の楽しみ、喜びのなかに入り込んでいるから別に御馳走を食べに行ったり、御馳走しようという気もおこらない。

それと同じ感じから行きますと、改めて余暇を考えないと駄目だとか、どうやって余暇を楽しむかを考えようなんていうことはやっぱり働け働けという貧乏人根性の一つの現われじゃないかという感じを持つわけです。

藤田 昔、近所のおじさんやおばさんが集まると、そのなかに歌舞伎の声色をするおばさんがいたり、小唄を歌うおじさんがいたりして、それは一つの文化だったと思うんですが、今頃、団地で集っても子供にピアノを習わせてるお母さんは多勢いいるけれど、お母さんがギター弾けるかという弾けないし、お父さんが二部合唱でできるかという、できないし、そういう意味では文化不在でしょう。昔は貧乏だったけれどそんな文化はあった。今はそんな人ひとりもない気がしますね。

山本 それはゆとりがあったからだと思っんですよ。お金がたくさんあろうとなかろうとゆとりはあった。ゆと



妹尾 美智子さん



藤田 敬一郎さん

りがないからそういうことができないので、ゆとりがあれば自然に出て来るのじゃないでしょうか。

藤田 一番大事なところはそこでしょうね。

田中 ゆとりは何でなくなってしまうたんだろう。

山本 日本人の勤労形態が原因でしょうね。特に戦後働くことに一生懸命になって、お金さえたくさんになったらということばかりを考えて来て、そこで置き忘れて来たのがゆとりじゃなかったんだろうか。昔の人はお金も欲しかったけれどゆとりもあった。私はそこへもう一度もどしてみたいという気なんですけどね。

★自己主張あつての余暇

妹尾 体験からいいますと暇はつくらないと出来ませんね。与えられて出来るものじゃありませんよ。

田中 自分の心の問題だな。

妹尾 あくまで心の問題だと思いますね。だから、ガツガツ働いてから遊んでやろうということがおかしいんですね。仕事以外のことに関心を持つという気になりまして、空いた時間を捜したって駄目ですね。空けなければ。余暇だって仕事の一部分みたいな感じになるんですよ。たとえば、ボツと時間が空いたとしてもその気にならなかったら、これを余暇といつていいのかわかりませんね。

田中 ゆとりの心なんてものは忙しさの心、勤勉な遊びとひつついてると思うわけです。高度経済成長でみんな浮かれてしまつて、本当の暇、自分自身の本当の暇が欲しい、ゆとりのある遊びをしたいという意識がないときにしつかり遊ばないと駄目じゃないかという声が出てきたわけです。それがレジャー時代といわれた悲劇なんですよ。

竹田 洋太郎さんがいつていたように、レジャーにしろ、ファッショにしろそれはあくまで自己主張なんです。自己主張の気持ちを持つてないとファッションもレジャーもありませんよ。

妹尾 それは間違いないです。夢中になって仕事をし続けて来て、ふと立ち止ったときにこれでいいんだろとか、自分というものを止して行ったり、自分を見つけていかないと駄目じゃないのかという考えが、ひとつ遊んでやろうという意識に変つて来ていることは事実ですね。自己主張には色んな形がありますが、遊びという形の自己主張が出てきていると思うんです。

藤田 一人一人に自分が生きていると実感することは何ですかと聞いたときに、それがハッキリ答えられる人、つまり、オレは生きてるなあ、と思える時間を持つている人は遊びがものすごくまいし、仕事もテキパキと片づけていると思いますね。

レジャー時代に大型レジャーというものが花咲きまし

たけれど、あれはあだ花のように思えてね。そういう意味で、ファッションも、時間が十分あります。ゆとりもできました、さあ、ファッション、ファッション……といいい出したらファッションのあだ花が咲くという気がするんですが……。忙しい中に充実した遊びを持つというのじゃなくて、遊びばかり考えとか、ファッションばかり考えると、あれかこれかみたいな発想にはどうもついて行かないですね。

友だちのなかでも遊ぶのが面白いという連中は面白いが連中ですね。何にでも、これはすごいな、とすぐ驚ろくんですね。

田中 野次馬なんですね。

藤田 面白いが連中は余暇課や文化局が色々情報提供しなくても結構自分たちで面白がっているわけです。

山本 他人の遊ぶことまで放っておけという人が多かったらいいですね。ただ、働くことを苦にせずに、働くことがレジャーのような人たちはどうすればいいのか……。そんな人も忙しさから解放されないと本当に心が豊かにならないのじゃないかと思うんですね。

田中 ある本に書いてあったんですが、人間には四つの型があります。テレビ人間、仕事人間、読書人間、遊び人間。

仕事人間の場合はどうなるかというと、自己主張というか、自分というものを大切にするとはなじみがないままに育って来たので、みんなが遊ぶときに一緒に遊んで来るんですね。遊ぶのも何でもみんなと一緒にやって、私は私で楽しむ、という自己主張はしにくいですね。

妹尾 遊びの楽しさを知らない方がたくさんいるんですね。特に昭和一桁は駄目ですね。遊びを楽しむ経験のない人たちが、出来ない人たちがたくさんいるんですが、そういう人たちに遊びとは楽しいんだよと教えてあげる、感じさせてあげるのが文化局の仕事じゃないんですか。

藤田 都会で生活をしている女性は本気で遊ぶ気がある

のでしょうか。婦人グループがよく勉強をしているけれど、その仕方が果して自己主張になっているのだろうか。余暇が目指すのが自己主張なら勉強をしているご婦人たちは本当にそのなかで自己主張ができていますか。

妹尾 そのご婦人たちにとっては勉強することが遊びなんですよ。だから、逆にいうと、自己主張出来るような勉強の場をつくらないと失敗しますね。

田中 レジャーの基本には自己主張、自分は自分で楽しむ、という根性がないと駄目だというわけでしょう。それは、知ってる者同士だけで楽しむというものじゃなくてね。いつてみれば特殊主義と普遍主義とがあって、特殊主義というのは、知り合いの人とだけは楽しめる、抜擢する大切にします。顔と顔とのつながりを大切にします。

これが日本の社会の構成原理の根本ですね。反対に知らない者同士が絶えず気軽にあいさつを交わしたり、あっさりとは仲良しになれる。そういうのが普遍主義なんです。レジャーを本当に楽しむためには知らない者同士が大変スマートに楽しみ合える人間関係をつくらないと本当の意味でのレジャーなんか楽しめませんよ。

自己主張とまるで見知らぬ人とのスマートなつき合いの二つができないと本当のレジャーを楽しむことはできないと思う。また、これが出来る市民が本当の市民で、その可能性を持っているのが神戸市民だということ

をいいたいわけです。神戸市民まで知っている者同士だけで楽しんでいるようじゃ駄目ですよ。だからファッションにしても、ああ、あの人は長いスカートだ、じゃ私は短かいので行くわ、という位の意識がないと神戸は神戸らしくない。こういうことは、おっちょこちょいという神戸っ子の特質で行けると違わないかな。

藤田 文化局などでレジャーに関するプログラム、知らない人ばかりを常集めるプログラム、計画的に知らない人がうまくつき合える技術を習得するようなプログラムを組まないと駄目だと思います。神戸に流入して来

る人は違った風土からいっばい来るわけですから、そういう技術のない人が神戸に来た場合、神戸の風土に慣れて貰うために計画的な訓練が必要になりますね。それが行政の仕事だと思っていますね。

妹尾 政令指定都市の婦人団体でも、京都や大阪ではどこそこの奥さん、という格式がありまして、われわれのようなおつちよこちよいが集ってワァーッとやるようなことは殆んど不可能に近い雰囲気ですね。神戸ならバレーボールでも、民踊でも、さあやろうとなると、みんなが寄って来るんですね。

船員さんにも最終的には神戸で住みたいと願う人が多いんですね。こういう人たちは世界各国の港を巡って色々つき合いがあるわけですが、なぜかときくと、景色がいいということもありますが、非常に気楽につき合える、ネッチリしたものがなくて、サラッとしたつき合いができるということですね。そういう特質が神戸にはあるんですね。

田中 早朝登山も本当に神戸らしい行事ですね。知らない者同士がぞろぞろ山へ登るわけですね。

妹尾 うちの民謡の集いもそうですね。あれはうちの会員さんだけじゃなく誰でも参加出来るんですが、はじめは一日だったのが現在では四日になっています。そうしないと消化し切れないほど人が集って来るのですが、それも初対面の人同士なんです。それが結構楽しんでやっている。他の都市も真似しようとするわけだけど駄目だそうですね。一日分も集まらないらしいですね。四百曲のうち、うちの関係は六十曲で、あとは和歌山とか沖縄などのグループがやっているんですね(笑)。

田中 これはアメリカでいえばミュージカルだね。色んな国から来た人がそこで国を越えてお互いに愛して行かなきゃならない。仲よしになって行こうという一つの熱望みたいなものが底辺にあって、アメリカのミュージカルのはやる原因になるわけですね。わが国の場合には民謡という形で熱気が集って来ている感じがですね。

★ファッションも自己主張だ

田中 竹田洋太郎さんは、ファッションが育つには、自己主張と社交界があり、さらに、音楽があること。そして職人さんが大事にされるまちであることが条件になるといつてましたが、京都の場合、スムーズにファッションがあるのは、社交界、つまり都おどろきというのを見に行く人たちが存在するわけですね。そのへん神戸はどうなんだろう。それが神戸の経済の地盤沈下と関係して来るわけだね。

神戸は、都市計画にしても、何にしても役所がまず主導して行っているわけですね。民間の資本が主体となつて、自分の責任で自分でアクセントをつけてまちづくりをして行くということを命がけで——ひとつ失敗したらひっくり返ってしまうわけだから、やるということはないみたいです。何とかセンターとか何とかプラザとかを役所がつくるけれど、つくったあとの運営はそこに入る専門店にまかせてしまう。それでうまく行くんでしょうかね。専門店にしても、最初から自分で資本を入れてあとあとで頑張ってもうけて行くというのが希薄になるところに果してゆとりみたいなものが出て来るんだろうか。ゆとりのなから、社交界というものが出て来るわけでしょう。

社交界というと嫌味だけど、本場のレジャヤーは、芝居をみるにしても夜の八時半から始って、というのは、それまでに食事をしたり身なりを整えたりして、それからゆつくりとみることなんですよ。それが本場のレジャヤーだと思います。私がアメリカにいたときは本当に楽しかった。何故かといったら八時半から始まりますね。そうすると、昼間はバミューダーをはいていた女の子なんかもイブニングドレスに着替えてくるわけですね。それがものすごくいい(笑)。

藤田 あの華麗な変身というのはすごいですね。

田中 それを含めての社交界というんですね。これが本

当の自己主張であるし、ゆとりであるんですね。

藤田 僕の場合、ファッションというのは女の子の着物ぐらいにしか見てないわけです。神戸のファッション都市構想は知識としては頭のなかにあるんですが、実感としてはファッションというのは着せ替え人形的なものだと思ってるわけです。ただ、着せ替え人形にするという事は変身でしょう。人間が変われるわけです。ファッションは変身だと思っんです。

だから、神戸のある場所に行ったら何らかの形で変身出来る。非常に洗練された人形になり切れるという場所を提供することが大事だと思うんです。それと、プロダラムを提供すること。ファッションは変身から離れたら駄目だと思う。つまり、何かに切り切れるということ。これがファッションの基本だと思いますね。

田中 変身できる場が欲しいですね。

妹尾 われわれがやっている消費者運動の立場からファッション都市神戸を煮つめることが大事な問題になって来ているわけですが、そのときに、ファッションという言葉と、われわれがいう過剰機能の問題との接点をどう結びつけたらいいのだからと考えるわけです。

過剰機能ってものがどんどん指摘されて来るわけですね。こんなものはいらんのかなとか、いや、それは主観の違いですよ、とかいうのが出て来るわけですね。過剰機能とファッションとの関係を追求して行く段階に入っているんです。ファッション都市構想を家庭の主婦からみてどうやってとらえて行くかがかなり考えられなければいけない問題じゃないでしょうか。

それと、母親の立場からしますと子供に美しい心を育てて行く努力がファッション都市構想のなかでわれわれに与えられた一つの役割分担じゃないかと思うんですね。ですから、大人の社会だけを考えるんじゃないで、子供の心を育てて行くような、子供を一方では忘れずにいて欲しいなあということなんです。ファッション都市というものを長い構想でみた場合、その下支えは何かと

いったら、母親だと思いますね。ここらが案外おきざりにされている。私はそう感じますね。

藤田 確かにファッション都市では、婦人の支えというものが大きいですね。

山本 ピアノとかお花とか琴とか、何々教室とか何々文化センターとか、勉強するところがありますでしょう。

あのなかで九十九パーセントは女性ですね。だから、ファッション都市という場合、さつき母親とおっしゃったけれど、女性を抜きにしては語れない。今のところ、お花の稽古なら画一的なお花の稽古しかない。そのなかから何か独自性みたいなものを出して行く、脱皮して行く何かが必要じゃないかといっているんですけどね。ファッションというのは文化ですからね。

田中 ファッション都市は、一つの情報産業都市だと私は理解しています。知的産業あるいは情報産業、つまりものにはハードな面だけではなくてソフトな面も一つの値打ちだし、その値打ちを理解する都市だととらえているわけです。それと、色んな意味のアクセントがまちにつかないと駄目なわけです。神戸でも佐賀でも高松でも一緒だということでは駄目だ。神戸にはこういう特色があるということを出して行って、しかも商店そのものにも非常にアクセントのあるものが出て来ないと駄目ですね。

だから、センタープラザが出来るけれど、平均化したものが出来たんじゃ神戸には合わない。トリアロードとかあっちこっちのまちそのもののなかで、サンチカはこうサンプラザはこうという、ただ単なるものだけを動かす、実用的機能というものだけじゃなく、情報の機能というものがいるわけですね。そういうアクセントが入らないことには駄目であって、それにはやっぱり、専門店のみなさんに頑張ってもらわないと。わしらの神戸は高松と違うんやと、どことも違うんやという意気込みで、自己主張をして貰いたいですね。そうしないとレジャーもファッション都市もあつたものじゃないですよ。

(神戸竹葉亭にて)

経済ポケット ジャーナル



★変わり行く三宮市街地

7月26日さんブラザ西隣のセンタープラザが一部オープンしたが、これに先立って4日、センタープラザ西隣の三宮市街地改造第一地区ビル(A棟、生田区三宮町2)の起工式が宮崎神戸市長ら関係者の出席で、午前9時50分から現地では、その後、さんブラザ5階駐車場で祝賀会が行われた。



第一地区ビル建設予定地

このビルは、地下2階、地上7階建てで延べ面積は三一、三五二平方メートル。百五十店の入居が予定されているが、元の場所にあった三宮市場がそっくり入ることになっている。総事業

費は80億円で、昭和52年の夏に完成する予定。

★西神戸の新しい顔

7月5日神戸鉄ビル(兵庫区大開通一)がオープンした。これは神戸電鉄が総工費19億円で二年近くをかけて完成したもので地上11階地下2階で地上3階までミッシーズプラザ「神鉄一番街」、5階から7階までが総合結婚式場・宴会場「神鉄会館」となっている。

このビルのエレベーターは壁面に取りつけられたガラス張り。また、神戸高速新開地駅西口から同ビルまでの地下道の右側には神戸



おどけた「無心童子」たち

市内のパノラマ写真、左側には信楽焼きの小便小僧「無心童子」が愛さようをふりまいている。

★忠勇社長に若林氏

忠勇株式会社(本社・灘区)は7月30日の株主総会及び取締役会で若林與左衛門氏を新社長に決定した。



若林與左衛門社長

若林氏は大正13年神戸高商(現神戸大学)卒業後、すぐに忠勇の前身である若林合名会社に入社。昭和22年には若林酒造の社長、41年に忠勇の社長、44年に同社会長に就任したが、このほど社長に返り咲いたことで再び第一線での活躍が期待されている。神戸市出身。72歳。

★ビオフェルミン社長に寺

谷氏、副社長に広沢氏
ビオフェルミン製薬株式会社(本社・長田区)は7月28日の株主総会及び取締役会で寺谷信一郎氏を新社長に、広沢道夫氏を副社長に決定した。



寺谷信一郎社長

前二氏の昇格と同時に小野忠雄氏は顧問に就任する。寺谷氏は大正2年生まれ、昭和13年京都帝大法学部卒業、17年同社入社、36年取締役、46年常務、49年専務に就任。神戸市出身。

(訂正)

本誌七月号「神戸経営研修会レポート」記事で、メンバー紹介のなかに誤りがありましたので訂正いたします。

(例) 上島達司 上島珈琲本社社長
(正) 上島達司 上島珈琲本社副社長

★KOBEOフィスレディ★



水本 郁子さん(21歳)
東京海上火災損害一課勤務

今年、山手短大を卒業したばかりで、どこかしらまだ少女っぽいところが残っている。でもめめはじめてからは、だいぶ大人になった感じで、色っぽいとまではいかなくても女性らしくなったなあと思わせる。素直なお嬢さんで背のびをすることが少しもない。大学時代はフォークソング部に属していて、ソフトな声も魅力的だ。



市街地緑化の一環として市役所前にも色々と工夫がこらされている

株式会社

マキシシン

渡辺 利武

生田区北長狭通二丁目八

☎三三一六七一

デート株式会社

前田 新蔵

生田区三宮町一丁目

交通センタービル八階

☎三九一一一四九

有限会社

シンワ洋装店

岸野 利男

生田区三宮町二丁目一

☎三三一三〇九八

さんちか店 ☎三九一一五二五四

株式会社

サンサカエ

辻 光行

生田区元町通一丁目四八

☎三三一七八八五

株式会社

ウインザー

山田 六郎

生田区三宮町一丁目五の二

☎三三一七九五二

株式会社

アカシヤ

石井 省三

生田区三宮町二丁目三五

☎三三一二二三四



ファッション都市神戸をめざして

グリーンコウベ作戦

5周年を迎える



「ファッション都市神戸」にふさわしい環境づくりを——

神戸市は昭和46年度から「グリーンコウベ作戦」を始めた。これは緑がいっぱいで住みよいまちづくりを目指すもので、神戸市全域の約7割を自然の緑地帯として保護し、市街地の3割を積極的に緑化していく構想であり①市街地の緑化、②背山の緑化、③団地などの緑化、④臨海地域の緑化の4項目を目標としている。

市街地の緑化では①幹線道路に中央分離帯を設置する、②歩道の単体街路樹を連続したグリーンベルトへ改造する、③街園やロータリーに緑をふやす、④河川沿緑地帯を整備する、⑤街路樹の補植などに力を入れている。

また、新しい試みとしてフラワーロードに移動街路樹、移動分離帯も設置された。これは、神戸まつりのパレード時などに容易に取り外せるようにしたものである。これ以外にも「高中低木の混植方式」——植枠に1本ずつ植えなくて色々な木をとりまぜて植える方法もとられている。

(参考) 兵庫県の木——クスノキ、神戸市民の花——アジサイ、神戸市民の木——サザンカ

街ぐるみで都市創りを

石阪 春生 いし さはる

春生 はる お

〈洋画家・新制作協会〉

稲岡 必三 いな おか

必三 ひつ ぞう

〈カネボウベルエイシー株式会社〉

★ プラスアルファの楽しさを

稲岡 稲岡工業というのが明治42年の創業ですが、その前に播州木綿として江戸時代から木綿のほうをしていたのです。先々代ぐらいに、横浜に初めてタオルが入ってきた時、これはいけるということで始めたのですが、日本では全く売れず中国に輸出、これが当たったのです。日本でタオルが出始めたのは大正ぐらいからでしょうね。

それが稲岡工業です。カネボウベルエイシーというのは五年程前にすべて生活産業はファッションビジネスでないといけないというカネボウの社長がタオル部門をやるということで稲岡工業と合併を組んだわけです。同時に私としても稲岡工業の新しいタオルのいき方として、タオルが生活の余裕というか、ただ水を拭けばいいというだけでなく、プラスアルファをのせて、タオルを使っただけでなく、豊かさとか美しさとかが与えられれば、と考えていたのです。生活必需品プラスアルファ、パスル



石阪 春生 氏

ームに一枚のタオルがあるだけでその家庭が何となくなごやかで、何となくファッショナル的になるというタオルが理想的なわけです。ベルエイシーの経営感覚というのはタオルにはこういう柄があります。プレイボーイはこんなタオルです。森英恵はこんなタオルです。アメリカでは、ヨーロッパではこんなタオルです。というふうに我々はこれだけ用意しましたと情報を提供してお客様の美的センスで

もって好みのタオルを買って頂くということなのです。石阪 何々酒店のタオルしか知らなかった我々……(笑) カラータオルが出た時すごいショックがありましたね。そのへんからタオルが変質してきた。

稲岡 タオルは一番安くて生活の豊かさを満喫できるのです。そういうところまで生活に心くばりできるというのがこれからの人間らしい生活になってくるのでしょうか。タオルでもしろいのは、百貨店によって全部上の部がちがうのですね。雑貨部タオル課、呉服部タオル課、寝具部タオル課、婦人服部タオル課、家具室内部タオル課、全部ちがうのです。その意味でうちはどの部門とでも組めるわけですね。

石阪 それは興味ある話ですね。

湯殿とかトイレとかは、今まで日本人の生活のなかでは室内的ではなかったのが、今、室内化しようとしているところが私はおもしろいと思います。異人さんは昔から室内的なのです。それが日本に定着してきているようですね。

稲岡 昔の日本は、床の間があつて、それがあらゆる生活の余裕を表わし、床の間と飾り棚ぐらいが装飾の場所であつたのですね。

石阪 そこで勝負していた。また見栄をはったり。あの部分は室内ではなかったのですね。台所とは女中さんが苛められているところ(笑)……情景的には全部そのようなものでしたね。

稲岡 絵画も床の間にかけるものであつて他のところには掛けない。欧米では玄関にも階段の途中にも絵が掛けられ、あらゆるところがいわゆる室内的な場所として提供されているのですね。

石阪 たたみの上にじゅうたんを敷いて西洋家具があつて、その反対側に和だんすがあり、その間にテレビを置いて、あの現実はいへんなことですよ。どの民族にもありませんよ。西洋文化がこれだけ怒濤の如く流れ込んできた国ですからね。各個人で処理していかなければならない時代がきたようですね。

稲岡 日本人は混合民族時代みたいになってきました

ね。我々もどういう柄が当るかというのをみるのも大変なのです。フランス人そのもののような日本人、黒人のような感覚の日本人もいる。そうかと思えば若い人で浪花節の義理人情みたいな人もいますよ。

稲岡 必三氏

石阪 女の子もすごい個人差ですね。ユニークな人なんて言葉がありますが、一人一人と話をしているとみんなユニークですよ。今まではユニークさをかくすということが道徳みたいところがありましたが、今はユニークなところ



をみせるということが一つの知恵になっているのですね。企業の中でユニークなことばかり話していると、あいつケツタイな奴、ということになる。(笑) そのケツタイな奴を経営者はオフリミットしていたけれど、経営者の考え方も変化してきて、そんな人間に優秀な点を見い出せるようになってきていますね。

★ネゴシエーションの知恵

福岡 アメリカ人は混合民族で、その混合民族を監督する知恵があるのでしょいか、Negotiation(根回し)のやり方を教える先生がいっぱいいるのです。日本でもそれは必要だと思いますね。日本では部下は命令を出せば聞くものだということで、どうすれば人が動くかということとは考えないのですね。アメリカ人はそうは考えませんね。管理者はいかに仕事をさせてペイさせるかを考えます。どうすれば人が動くかと考えるのがアメリカ経営学です。

石阪 混合民族として苦勞してきた民族なので、その苦勞の結果人間関係は根回ししかないという知恵でしょう。

福岡 一つの命令を上司として出す時にある程度の根回しをしておくのです。教育の専門家が企業訓練をする、論理的なデータを手摘みしたりして根回しのやり方を教えるわけです。各々が個性があつて孤立してくる社会になるとそれなりの根回しの仕方がありますね。そういう知恵というのがますます必要でしょうね。部下も上司に自分の思うことをやってもらうには根回しをすればいいのです。そうすると平社員でも会社を動かせるわけですよ。課長を根回し、部長を根回し、そして社長を根回しして、自分の思うことを会社の方針にしまえばいいわけですね。管理者として根回しを忘れて命令したら総反撃を食う場合もあるのです。日本人も今や、そのアメリカ経営学を習わないといけませんね。

★街ぐるみで都市創りを

福岡 神戸市がファッション都市化をいいますが、急にファッション都市化は実現できないので、ちがう方向から神戸市民の意識を統一化することが大切ですね。神戸市はファッション都市としてしか生きる道はないのだと一種の根回しをするのですよ。

石阪 ファッション都市化のキャンペーンでトップが花火を打ち上げているだけではだめなんです。それで市民が疎外感を感じてくるようになったりすると危いですよ。**福岡** 神戸市はファッション都市でしか生きる道はないのですよ、だからその方向へ皆が協力していこう。というふうにもっていかねばなりませんね。その点は京都市民は上手ですね。

神戸市も空港、あるいは空港との連絡口が必要だと思います。ファッション都市として不可欠でしょう。ハイカラな街、神戸をつくるのに昔は港が果たした役割が大きかったのです。ヨーロッパファッション、アメリカ文化、そういうものの中継地点の形で神戸から日本へ広がっていくという役割をするのが昔の港、今の空港ですよ。

そして、道路一本にしても街を走る車のカラーひとつにしても美しくシステム化した都市ができれば、国際的にも神戸に行くときっと素晴らしい街になる。その一つのカラーポリシーが決まれば、タクシーも市バスも新しく建てるビルも応援してもらって、街ぐるみで神戸らしい街づくりをしていくようにするわけです。それにはファッションリーダーというのが必要ですね。

石阪 ディレクター。どういうサイドにも通じたディレクター。あまりに専門的でも困りますね。何々にプロフェッショナルであると、そっちに走ってしまうので街づくりにならないような気がしますね。

福岡 全市民的な協力がある方向というのが一番望ましいですね。多くの人に来て頂いても気持ちよく歓待できる街でないと神戸は生きられないですね。